

## 自転車愛好家、太宰府に集結

明治39（1906）年6月17日、太宰府天満宮境内で、福岡市の自転車同業組合主催、九州愛輪家懇親会が開催されます。参道の泉屋に事務所を置き、神苑内の茶店はすべて貸し切り、千年祭の記念事業として明治34年に建てられた文書館は昼食会場に、社務所は抽選会場に充てられました。遠方からの参加者のため、福岡市内は大名と東公園に、筑紫郡内は二日市と原田にそれぞれ集合地が設定され、赤い徽章を付けた案内役がそこから各集団を先導。参加者には官公庁のお歴々や医師、事業家たちの姿も目立ち、この日は総勢500を超える大自転車集団が太宰府を埋め尽くしました。



懇親会では、自転車競走や曲乗り、音楽隊の吹奏などが企画されましたが、一番の目玉は1000円の自転車が一等賞品の抽選会。明治39年当時、例えば太宰府町役場の課長さん級職員の年収は平均98円（福岡県筑紫郡太宰府町明治39年度歳入出予算表）。抽選会目当てに、わざわざ汽車に自転車を積み込んでまでやって来る愛好家も多かったようです。

この様子は、「自転車大失敗濡れ日記」として新聞『九州日報』で9回にわたり紹介されました。ある記者が愛輪家の同僚とともに福岡市内から参加、

梅雨の晴れ間の下、往路はペダルも軽く、寄り道して観世音寺の仏像を見学。天満宮に着いて一等賞品の当選を祈願し、泉屋にて開会を待つ輪友たちと合流。ところが、期待高まる彼らの運命は、正午過ぎからの降雨により暗転します。文書館で大混雑の午餐を終えるも徐々に雨脚は強くなり、楽しみにしていた催しはほとんど中止。絵馬堂での自転車雨宿り代として3銭を徴収され、頼みの抽選会で手に入れたのは残念賞の「チック」（整髪料）1本。さてこれから降り止まぬ雨の中、舗装もない夕闇の復路に挑まなくてはなりません。

どの参加者も雨具の用意なく、油紙や莫蔭を即席のカツパに仕立て、ぬかるむ悪路にバランスを崩すまいと必死の姿は沿道の見物人の笑いを誘い、記者氏は土産物調達もあきらめ、菅公に祈りつつ原稿執筆という使命感のみで新聞社を目指します。全身泥だらけの雄姿をさらした同行の同僚にいたっては、社で「泥喰院殿蚯蚓大居士」の称号を授かる始末。

しかしこの空前のイベント、紙上9回もの捧腹連載をもたらしたことは、記者氏にとつてまさに天恵だったのではないでしょうか。

太宰府市公文書館 藤田 理子